

副詞と否定 —— 中古の「必ず」 ——

小柳 智 一

はじめに

ある種の副詞が否定と呼応すると、いわゆる全否定か部分否定かという問題の生じることがある。例えば、

1 授業をすべて受けられなかった。

は、一つも受けなかったという全否定の解釈（学期の始まる直前に入院したという文脈）と、いくつかは受けたという部分否定の解釈（学期の途中で入院したという文脈）ができる。どちらになるかは文脈によるが、例えば「は」が「すべて」を卓立すると、部分否定の解釈に決まる。

2 授業をすべては受けられなかった。

つまり、文脈によらなければ判定できないこともあるし、形式から明白に判定できることもあるのである。

このような問題は中古語でも生じ、内省が働きにくい分、現代語以上に微妙である。本稿はその一例として「必ず」が否定と呼応する場合を取りあげる。以下、まず第一節で副詞、第二節で全否定・部分否定について考え、続く第三

節で「いと」が否定と呼応する場合を整理し、これらの考察を踏まえて、第四・五節で「必ず・必ずしも」が否定と呼応する場合を観察しようと思う。

第一節 陳述副詞と程度副詞

ある事態が在る時、その事態は何らかの在り方で在る。例えば「開花」という事態は今現に咲いているという在り方だったり、まだ咲いていないがこれから咲くという在り方だったり、あるいは毎年今頃咲くという在り方だったり、様々にありうるが、必ず何らかの在り方で在る。この在り方のことを「様相 (modality)」と呼ぼう。様々な様相の根本となるのは、その事態が起こっているか起こっていないかの対立だと考えられる。なぜなら、もし冬眠から醒めた蟻が蠢いているのに出くわしたら早急に避難しなければならぬが、蟻などいないのであれば慌てる必要はない、というように、生きることに直截関わるからである。

この「起こっているか起こっていないか」には二つの側

面が認められる。一つは「起こるか起こらないか」、すなわち事態が成立するか否かという「成立の側面」で、もう一つは「起っているか起っていないか」、すなわち事態が存在しているか否かという「存在の側面」である。これらは事態の様相の二つの側面なので当然相關する。常識的に考えて、事態が存在すればその事態は成立しており、非存在であれば不成立である。ただし、注意を要する点が二つある。一つは、〈不成立の事態〉はそれ自体としては成立しているとも捉えられるということである。例えば、

3 とうとう彼は来なかった。

は〈彼が来る〉という事態の不成立と言つてもちろん謬りでないが、その一方で〈彼が来ない〉という事態の成立と見ることもできる。もう一つはこれと平行して、非存在も存在の一種と見なしうることである。例えば、

4 昨日から鍵が開かない。

は〈鍵が開く〉の非存在であると同時に、〈鍵が開かない〉の存在でもある。日本語で非存在を表す「ない」が「高い・少ない」などと同じく、存在の有様を表す形容詞であるのは、このことを強く反映している。要するに、不成立・非存在は常に成立・存在に転換しうるのである。

次に、事態の様相に関わる量について考えたい。まず事態の成立には様々な程度がある。例えばこの花が明日咲く程度は、ほぼ確実な場合もあるし、ほとんど咲きそうにな

い場合もあるし、どちらとも言えない場合もある。こうした程度の総体は連続する量として把握できるだろう。この量が大きければ大きいほど、事態の成立する蓋然性は高く、最大なら事態は成立しており、零なら不成立である。この量を「成立程度量」と呼ぶことにしよう。

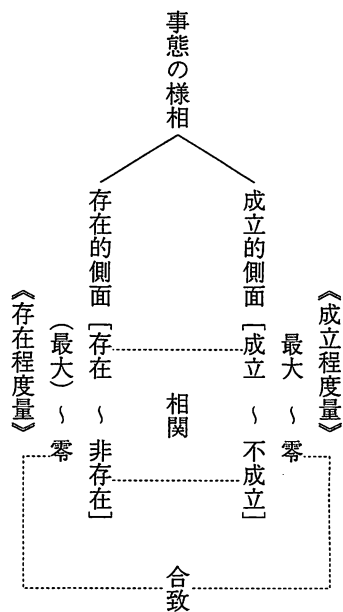
もう一方の、事態の存在に関しても程度差が見出される。例えば、咲いている花の咲き具合は非常に美しかったり、並だったり、あまり美しくなかったりする。このような程度の全体が量の大小として序列をなすことは容易に理解されると思う。この量は論理的にはいくらでも大が考えられるが、「この上なく・最も」などの表現が可能なことからわかる通り、上限を決めてあたかも最大であるかのように把握することができる。その逆の零の場合は非存在である。この量を「存在程度量」と呼ぼう。

この二つの程度量は零の場合に合致する。すなわち、成立程度量が零なら事態は不成立なので非存在、よって存在程度量も零である。しかし、それ以外の場合は合致するとは限らない。例えば、

5 この文章はどちらかと言えば上手に書いてある。

は〈文章を上手に書く〉ことは成立しているので成立程度量は最大だが、存在程度量はあまり大きくない。

以上述べたことを簡単に図示しておく。



さて、事態は原則として文(句)が表す。実際に右掲1～5は文である。また、程度量は一般に副詞が表し、成立程度量を表す副詞には「きつと・たぶん・もしかしたら」などがあり、存在程度量を表す副詞には「とても・いつそう・すこし」などがある。前者はいわゆる陳述副詞、後者は程度副詞である。大雑把に言つて、陳述副詞は成立程度量を、程度副詞は存在程度量を表すと考えてよい。さらに、陳述副詞・程度副詞のように、様相と程度量を合わせて表すものを真に副詞らしい副詞と見なしたい。

副詞と同じように様相を表すものに、述語(助動詞を伴う場合も伴わない場合もある)がある。例えば「くだろう・くかもしれない」などは事態が起こっていないことを、「た・ゝている」などは起こっていることを表す。ともに様相を表す副詞と述語とは呼応し、特に助動詞は成立的側面を

卓越的に表すので、陳述副詞と助動詞の呼応は多彩である——ただし、陳述副詞は必ず特定の助動詞と呼応しなければならぬわけではない——。次のように、陳述副詞は助動詞と呼応しつつ成立程度量を細かく表し分ける。

6 a 彼はきつと叱られるにちがいない。

b 彼はたぶん叱られるだろう。

c 彼はもしかしたら叱られるかもしれない。

一方、程度副詞は助動詞との呼応がないわけではないが(次節19参照)、それほど目立たない。これは、存在的側面が述語では細かく表し分けられず、肯定形か否定形かの二つしかないからである。その代わり、主に形容詞類によつて「赤い・上手い・痛い・美しい」など、存在の有様(情態)が多様に表され、程度副詞はその有様に添う形で存在程度量を表す。次の例は形容詞を修飾しつつ存在程度量を細かく表し分けている。

7 a 彼女の乗馬の姿勢はとても良い。

b 彼女の乗馬の姿勢はそこそ良い。

c 彼女の乗馬の姿勢はすこしだけ良い。

しばしば、程度副詞は情態の程度を限定すると言われるが、それはこの現象を指す。しかし、本質的には、多様な有り様すべてに共通する存在——例えば「良い」は分析すれば「良く在る」で、存在の意が内在している——について、その程度量を表すと考えるべきである。

本節は、副詞論の中で比較的述べやすい部分を、しかも図式的に単純化して述べたにすぎないが、第四・五節の準備としてはこれで十分である。まとめておこう。

①陳述副詞は事態の成立程度量を表し、助動詞との間に多彩な呼応を見せる。

②程度副詞は事態の存在程度量を表し、形容詞類を修飾する形で用いられる。

本稿で取り上げる中古の「必ず」について高山「二〇〇二」は、推量などと呼応する場合（８）は「蓋然性大」を表し、命令などと呼応する場合（９）は「確実性大」を表し、それ以外（１０）は「頻度多」を表すとする。

８必ずよからぬ事、出で来なん。へ源氏物語・賢木、『源氏物語大成』三四九⑫

９必ずその日違へずまかり着け。へ源氏物語・澤標、四九三⑭

１０月ごとの八日は、必ず尊きわざせさせ給へば、へ源氏物語・手習、二〇五〇③

最後の場合（１０）は、時間的な観点からは確かに頻度が話題になるが、事態の成立の側面に注目すれば、一定の状況下における事態成立の蓋然性の高さを表すと言える。よって、結局、三種に共通するのは、事態の成立程度量がきわめて大であることを表すという点であり、「必ず」は典型的な陳述副詞と見なすことができる。

第二節 全否定と部分否定

否定文を理解するとは、何をすることだろうか。例えば、
11 花壇に花がきれいに並んでいない。

は、花壇に花が並んでいることは並んでいるが、きれいに並んではないと解するのが普通だろう。つまり、否定されるのは「きれいに」の部分だけで、「花壇に花が並んでいる」は否定されずに残る。また、

12 白い花は咲いていない。

の自然な解釈は、花は咲いているがその中に白い花はないというものである。つまり、「白い」の部分だけを否定するという解釈である。

このことから、否定文を理解するとは文の一部を否定することだと考えられる。言い換えれば、肯定部分がなるべく多く残るように解釈するのである（もちろん文脈から逸脱しない範囲で）。そうでなく文全体を否定すると、その文の情報的価値はなくなってしまう。もし11全体を否定し、花壇も花もなく、ゆえに花壇に花が並んでもいないと解するなら、全く無価値な文である。一般論として、我々はすべて否定したり疑ったりすることはできない。ある事柄を否定したり疑ったりするには、それより多くの事柄を肯定し、前提としなければならぬのである。

否定される部分（以下「焦点」）がどこになるかは、最

終的には文脈による。が、焦点になりやすい部分と、そうでない、すなわち前提になりやすい部分との傾向差はありそうに思う。11は連用修飾語「きれいに」が、12は連体修飾語「白い」がそうであるように、構文的に見て、修飾語は「格―述語」に比べて焦点になりやすいと考えられる。「格―述語」は文の基礎となる骨格を構成するが、修飾語はその骨格に対して修飾・内容規定を行うからである。

それでは、文の一部しか否定しないとすると、全否定・部分否定は何についての「全・部分」なのだろうか。それは外延量、分量・数量、程度量といった量についてだと考えられる。部分否定は部分肯定でもあるが、それは、全体の量の中の一部だけを否定すれば、自動的に残りを肯定することになるからである。まず外延量の例を挙げる。

13 a 生き物の姿が見えない。

b 人間の姿が見えない。

a が成り立てば b も成り立つが、b が成り立つても a が成り立つとは限らない。これは a の「生き物」が b の「人間」より外延が広いからである。「生き物」を外延の全体とすれば、それを否定する a を全否定、その一部だけを否定する b を部分否定と見ることができる。しかし、これは、「生き物」が「人間」を含むという語彙的・分類的な包含性によるので、本質的には否定と関係がない。結果は逆に、肯定でも同様のことが起こり、次の14は13と逆に、

a が成り立つても b が成り立つとは限らないが、b が成り立てば a は成り立つ。分量・数量や程度量についての否定ではこのようなことは起こらない。

14 a 生き物の姿が見える。

b 人間の姿が見える。

次に、分量・数量の例を挙げる。冒頭の1・2もこの例である。

15 a 課題を全部提出しない。

b 課題を全部は提出しない。

16 a 三個とも当たりでなかった。

b 三個とも当たりというわけではなかった。

これらは「全部・三個」という分量・数量の全部を否定するか一部だけを否定するかなので、問題なく a を全否定、b を部分否定と言うことができる。15は概括量、16は個数の例だが、他にも持続量（例えば「一時間ずっと」）や延長量（例えば「見渡すかぎり一面」）などがある。

最後に程度量の例を挙げる。17は陳述副詞、18は程度副詞の例である。

17 a 絶対に成功しない。

b 絶対に成功するという保証はない。

18 a 非常に美味しくない。

b 非常に美味しいとは思わない。

17 a が成功することを完全に否定するのに対し、17 b は

成功の可能性を残している。つまり、前者は成立程度量が零だが、後者は零でない。また、18 aは美味しいことの存在程度量が零だが、18 bは零でない。よって、17・18の aを全否定、bを部分否定と言ってよいだろう。

しかし別の見方もできる。17 aの「絶対に」は「成功しない」ことの成立程度量が大きいことを表し、18 aの「非常に」は「美味しくない」ことの存在程度量が大きいことを表すと見るのである。他方、17 bの「絶対に」は「成功する」ことの成立程度量を、18 bの「非常に」は「美味しい」ことの存在程度量を表しているの、aとbでは副詞の関わる事態が異なることになる。この意味関係の相違を図示すれば、次のようになる。

A〔副詞〕「――否定」 :: a 全否定
B〔副詞――〕否定 :: b 部分否定

Aは副詞が否定の作用域外にあり、「成功しない・美味しくない」という否定的事態——成立・存在に転換された不成立・非存在の事態（前節）——の程度量が大きいことを表すのだが、それを肯定的事態「成功する・美味しい」の側から見れば程度量零となる。Bは副詞が否定の作用域内にあり、先述のように修飾語は否定の焦点になりやすいので、副詞が否定の焦点となる。そのため、肯定的事態「成功する・美味しい」は完全には否定されず、程度量は零にならない。これが程度量に関する全否定・部分否定の

仕組みだと考えられる。³⁾

ちなみに、程度副詞は18 aのように否定的事態に関わりうるから、もっぱら否定的事態を選んでその程度量を表す程度副詞があっても不思議でない。例えば、

19 この店の料理は全然／たいして美味しくない。

などがそれである。助動詞（文末）と呼応すれば陳述副詞という単純な考え方がもし行われるとしたら、それは正しくない。「ない」と呼応する程度副詞もあるのである。

全否定・部分否定についてまとめよう。

③全否定・部分否定は量についての否定である。

④陳述副詞・程度副詞は、否定の作用域に入らなければ否定の焦点にならないので全否定を表し、入れば否定の焦点になるので部分否定を表す。

第三節 「いと」と否定

中古の代表的な程度副詞に「いと」があり、存在程度量が大きいことを表す。この「いと」が否定と呼応すると、存在程度量に関する全否定・部分否定を意味するが、ほとんどの場合、文型によって判定できる。その文型を詳細に整理したものに中村「一九九五」があるが、本稿と関心の在処が若干異なるので、再整理を施して示す。³⁾ ii型の「いと――」は連用句、iii型の「いと――」は連体句（準体句）のこともある。25参照）である。

i いと——否定

全否定

ii いと——は——否定

部分否定

iii 「いと——」名詞——否定

部分否定

このうち、i 型は前節の A の意味関係で解釈され、ii・iii 型は B の意味関係を表す。

i 「いと」 「——否定」

…A

ii 「いと——」 は——否定」

…B

iii 「いと——」 名詞——否定」

…B

i 型は「いと」が否定の作用域外にあり、否定の焦点にならないので、全否定になる。

20 いと聞きならはぬ事かな。〈源氏物語・若菜下、一一

三三⑩〉

21 なほいと安からざりければ、その日もえ出で給はず。

〈源氏物語・宿木、一七四六⑫〉

ii 型は、「いと」を修飾語として含む「いと——」が否定の作用域に入り、かつ「は」などによって焦点化されている。その焦点化された部分の中で、特に焦点になりやすい修飾語「いと」が否定されて、部分否定になる。

22 いと口惜しうはあらぬ若人どもなむ待める。〈源氏物

語・夕顔、一〇七⑥〉

23 見そめ奉りしは、いとかうしもおほえ給はずと思ひしを、〈源氏物語・胡蝶、七九五⑬〉

iii 型も「いと——」が否定の作用域に入り、ii 型と同じ

く「いと」が否定の焦点となり、部分否定になる。

24 「例のいとおどろおどろしき」酔ひにもあらぬを、〈源氏物語・若菜下、一二一八④〉

25 「いとやむごとなき」にはあるまじ。〈源氏物語・夕顔、一一四④〉

ところで、この対応にはわずかに例外がある。例外は i 型で部分否定を表すものに限られ、ii・iii 型で全否定を表すものはないようである。

26 髪の毛いと長からざりしけはひのさま、〈源氏物語・空

蟬、八五④〉

27 いと深からずとも、なだらかなる程にあひしらはむ人もがな。〈源氏物語・末摘花、二二三①〉

わずかにせよ、このような例外のあることからすると、i 型は本来、「いと」が否定の作用域外にあることを示すのでなく、否定の作用域に入るか入らないかを指示しないと見られる。そのため、i 型は全否定の場合も部分否定の場合もありえ、文脈がそれを決めるのである。ただし、部分否定であることを積極的に表す ii・iii 型が一方にあるので、それとの張り合いで i 型は全否定を表すことが多く、26・27 のような例が例外となるのであろう。

本節の要点をまとめる。

⑤ 程度副詞「いと」が否定と呼応する場合、文型と全否定・部分否定との間には対応関係がある。

第四節 「必ず」と否定

今までの考察から、「必ず」は成立程度量を表す陳述副詞で(①)、否定の作用域に入るか入らないかによって全否定・部分否定が決まる(④)と考えられる。また、「いと」がそうであるように(⑤)、「必ず」も文型によって全否定か部分否定かの判定ができるのではないかと予測される。これらのことを踏まえて、「必ず」が否定と呼応する場合を見よう。否定と呼応する「必ず」は、中古の和文資料および八代集から五五例を採集することができたが、あまり多くないので、中世の用例も参照する。

「必ず」が否定(否定推量・禁止・反語も含む)と呼応する例は、前節の「いと」と同じように、三つの型に整理できる。Ⅱ型の「しも」は副詞などの連用修飾語を卓立する。Ⅲ型の「必ず」は連体句・準体句の他、引用句の場合もあり、要するに補文的な従属句である。

Ⅰ必ず——否定

Ⅱ必ず——しも——否定

Ⅲ「必ず」——否定

まず、Ⅰ型は一八例あり、そのうち一四例は全否定と解される。

28(粗末な衣装で御嶽詣する習慣について) あぢきなきことなり。ただ清き衣を着て詣でんに、なでふ事かあ

らん。必ず、よも、あやしう詣でよと、御嶽さらに宣はじ。〈枕草子・一一九段、一七一⑩／全否定の「よも・さらに」とともに使われている〉

29例、参り給ひては、まづかの御方に立ち寄り、出で給ふとても、必ず過ぎ給はぬを、へ夜の寝覚・卷三、二四〇①〈

30女どもの家に行きて「心地の悪い覚え侍れば、苦しうなるは必ず生くべうも覚え侍れば、詣で来つるぞ」と言ひて、……。帰りにやがて心地いみじうわづらふなりけり。……。さて同じ月の二十九日に失せにけり。

〈栄花物語・卷第四、上・一五一⑪〉

31今はこの世の祈りなせそ。年ごろの願ひは都率天の内院なり。年ごろの願ひ違へず、都率天に必ず本意違へ給ふな。〈栄花物語・卷第三十六、下・四三二①〉

32我がここに(浮舟を)さし放ち据あざらましかば、いみじく憂き世に経とも、いかでか必ず深き谷をも求め出でまし。〈源氏物語・蜻蛉、一九五六①〉

33「いみじう聞き置いつことは、はかなきことも、必ず「見劣りせぬ」ことはなきを」と聞きつるに、へ夜の寝覚・卷三、二〇七⑩〈

例えば29の「必ず」は「過ぎ給はぬ」に係り、否定の作用域外なので、全否定となる。33はやや特殊で、一種の二重否定である。「見劣りせぬ」ことが「必ず」ないことを

言うので、やはり全否定だが、実質的には「必ず見劣りすることあり」の意を表す。

ただし、次の四例だけは例外的に部分否定を表すと解される。

34世の静かならぬ事は、必ず政の直く歪めるにもより侍らず。聖の帝の世にも、横さまの乱れ出で来る事、唐土にも侍りける。〈源氏物語・薄雲、六二二⑥〉

35賀茂の臨時の祭、……、使ひは必ずよき人ならず、受領などなるは目もとまらず憎げなるも、藤の花に隠れたるほどはをかし。〈枕草子・二二〇段、二五一⑭〉

36秋来ぬと松吹く風も知らせけり必ず萩の上葉ならねど。〈新古今和歌集・巻第四、三〇六〉

37露は袖に物思ふころはさぞな置く必ず秋のならひならねど。〈新古今和歌集・巻第五、四七〇〉

前節の「いと」のi型について述べたように、本来この文型は副詞が否定の焦点になるか否かを指示しないので、部分否定を表す例外があつても不審ではないが、少し詳しく見てみたい。

34は文中に「も」があり、II型の「必ず——しも——否定」と同様に考えたくなるが、「も」が「しも」と同じとは思われず、また、30「必ず生くべうも覚えず侍れば」・32「いかでか必ず深き谷をも求め出でまし（＝必ず深き谷をも求め出でざらまし）」のように「も」があつても全否

定の例があるので、妥当な説明ではない。実は34の例は諸本間に異同があり、青表紙本系統以外では、

○必ず政の直く歪める（のみ）に（し）も侍らず
のように「より」のない本が多い。青表紙本系統でも三条西実隆筆の青表紙証本には「より」がない。これなら、後述する部分否定を表すIII型の例「必ず政の直く歪める」にも侍らず」になり、例外でなくなる。

35・37の三例は、時代が異なり散文と和歌という文体差もあるが、共通して「必ずへ名詞へならず」という形なのは偶然でないように思う。類例は中世にも見える。

38世は只今失せなんずとて、必ず平家の一門ならねども、心ある人々の歎き悲しまぬはなかりけり。〈覚一本平家物語・巻第六、上・四〇六⑬〉

39（今様で病を癒したことに）必ず法験ならねども、通ぜる人の芸には靈病も恐れをなすにこそ。〈古今著聞集・巻第六・二六六、二二〇⑩〉

これらは、「必ずへ名詞へ」というわけではない、の意なので、「（必ずへ名詞へ）ならず」という意味関係だと考えられる。後述のIII型に近いと言えるだろう。

このような例外もあるが、原則としてI型は全否定を表すと見てよい。参考として中世の用例を挙げる。

40詩歌は閑中のもてあそびなり。さらに朝儀の要事にあらず。手跡は又一たんの興なり。賢臣必ずこれを先と

せず。へ保元物語・上、六五②

41 常住を聞きつる者は必ず惡道に落ちずと云ふ。へ発心集・卷七・四、日本古典文学集成三〇八⑧

42 因果必ず違ハヌ事、影ノ形ニシタガヒ、響ノ声ニ応ズルニ似タリ。へ沙石集・卷第七・七、三〇二⑭

次にⅡ型の用例は七例で、すべて部分否定を表すと見なしてよい。

43 官仕し給ふ人、必ずかの位（Ⅱ皇后の位）にしもなり給はず。へ宇津保物語・菊の宴、二・六九⑧

44（玉鬘は）必ずさしもすぐれじ。人々しき程ならば、年ごろ聞こえなまし。へ源氏物語・常夏、八三九④

45 かかるかたち（Ⅱ尼姿）なる人も、必ずひたふるにしも絶え籠もらぬわざなめるを、へ源氏物語・早蕨、一六八⑦

次例は反語の例で、「必ずかくは離れさせ給はず」の意である。この「は」「しも」と同様に連用修飾語を卓立しているとして、Ⅱ型に準じて整理する。

46 わづらひし所とても、必ずかくやは離れさせ給ふ。

（院の）おはします所近く侍ふもいとかしきを、（元の邸へ）渡らせ給はん。へ夜の寝覚・卷四、三一九⑭

43 に即して言う、「必ず」は「かの位になり給ふ」（特に「なり給ふ」に係り「ず」の作用域に入るので、否定の焦点となる。その一方で「しも」が「かの位」を卓立し

焦点化している（「いと」のⅡ型を参照）。つまり、意味上の

焦点（必ず）が形式上の焦点（かの位）と一致せず、複雑である。にもかかわらず、文意はこれに見合うほど複雑でなく、「かの位になり給ふ」ことが「必ず」ではないとい

うものである。大坪「二九七六」によれば、訓点語において、このⅡ型から次節のⅣ型「必ずしも——否定」への推移が見られると言う。和文においてもⅡ型はⅣ型より例

が少ない。これはⅡ型が複雑すぎるために、単純なⅣ型に淘汰されつつあるからであらう。次に中世の例を挙げる。

47 必ず禁戒（Ⅱ無言の行）を守るとしもなくとも、境界（Ⅱ相手）なければ何につけてか破らん。へ方丈記、三八⑤

48 必ずさしも思ひ寄らぬほどに、子一つばかりにもやと思ふ月影に、妻戸をしのびて叩く人あり。へとはずか

たり・卷一、新日本古典文学大系三三⑫

最後に、Ⅲ型の用例は九例見られ、例外なく部分否定を表す。

49 とくゆかしきもの。……。除目のつとめて。「必ず知る人のさるべき」なき折も、なほ聞かまほし。へ枕草子・一五九段、二二二⑥

50 「必ずそのゆゑ尋ねてうち解け御覽せらるる」にしも侍らねど、かばかり面なくつくりそめてける身に負は

さざらんも、かたはら痛くてなん。へ源氏物語・蜻蛉、

一九七八④

51「いつも必ずうけばりもて出づべき」物とは思し寄らぬ有り様なるに、へ夜の寢覚・巻四、二八四⑬

52 桐の葉も 踏み分けがたく なりにけり「必ず人を待つ」となけれどへ新古今和歌集5・五三四

53 女宮（＝女二宮）の御かたち、いとをかしげなめるは、

「女一宮は」これより必ずまざるべき」事かは、と見えながら、へ源氏物語・蜻蛉、一九六七④

否定の作用域に「必ず——」が入るため、「必ず」が否定の焦点となり、部分否定を表す。Ⅲ型が部分否定を表すのは中世（さらに現代）でも同じである。

54 げに「必ず添ひ奉りてまかでぬべき」にも侍らず。

へとりかへばや物語・巻四、新日本古典文学大系三〇

〇⑧

55「必ずかやうの事わが怠りにて流され給ふ」にしもあらず。万の事、身に余りぬる人の、唐土にもこの国に

もあるわざにぞ侍なる。へ大鏡・第四巻、一八二⑩

以上、「必ず」の場合も、前節の「いと」の場合と同様、文型によって全否定か部分否定かの判定ができることを見た。全否定を表すⅠ型の「必ず」は否定的事態の成立程度量が大であることを表し、部分否定を表すⅡ・Ⅲ型の「必ず」は肯定的事態に関わり、文全体として成立程度量がそれほど大でない（時に小に傾く）ことを表す。

第五節 「必ずしも」

現代語で「必ず」の部分否定表現は「必ずしも」だが、「必ずしも」は中古にもある。一般には中古でも部分否定を表すと考えられているが、塚原「一九九一a」「一九九一b」は全否定（塚原の用語は「全面否定」）を表すと主張しており、最初にこの点について確認する必要がある。塚原「一九九一b」に挙げてある五つの論拠を簡単に示す。

(1) 「し」は強調表現、「も」は添加表現なので、「必ずしも」は「必ず以外」を前提とし、それに「必ず」を強調して添加する表現になるはずである。

(2) 「必ずしも」は否定以外に推量・否定推量の表現と呼応する。

(3) 「必ずしも——否定」の例は、全否定としか理解できないものはあるが、部分否定としか理解できないものはない。

(4) 「必ずしも——否定」は口頭語脈に傾斜する文章表現である。

(5) 「必ずしも——否定」は古代語では全否定と認定すべきで、部分否定は後代の用法である。

このうち、(1)は「しも」を「し」と「も」の単なる加算と見てよいかわからないので、保留する。(2)は、塚原が推量とするのは反語の例で、反語や否定推量を含んで「否定」と

する本稿の立場からは問題にならない。(4)は全否定か部分否定かと無関係である。(5)は「必ずしも」が全否定を表すという主張であつて、理由ではない。よつて、(3)だけが残り、これを検討すればよいことになる。

塚原が全否定としか理解できないものとして挙げたのは、次の七例である。

56 八木のやすのりといふ人あり。この人、国に必ずしも言ひ使ふ者にもあらざなり。へ土左日記、二八①

57 かくて京へ行くに、島坂にて人饗したり。必ずしもあるまじきわざなり。へ土左日記、五七⑥

58 女は聞こえ高く名隠し給ふべき程ならぬも、人の御女とて、籠もりおはする程は、必ずしも氏神の御勤めなどあらはならぬ程なればこそ、年月は紛れ過し給へ、

へ源氏物語・行幸、八八九⑫

59 はかなくなり侍りなば、必ずしも今はのとちめを御覽ぜらるべき身にも侍らねば、なほ現心失せず侍る世になん、はかなき事をも聞こえさせおくべく侍りけると思ひ侍りて、へ源氏物語・若菜上、一一〇一①

60 惣て世の人の住処をつくるならひ、必ずしも身の為にせず。或は妻子、眷属の為につくり、或は親昵、朋友の為につくる。或は主君、師匠および財宝、牛馬の為にさへこれをつくる。われ今身の為にむすべり。人の為につくらず。へ方丈記、四一⑧

61 常者未転なり。未転といふは、たとひ能断と變ずとも、たとひ所断と化すれども、必ずしも去來の蹤跡にかかはれず、故に常なり。へ正法眼藏・仏性、二二二⑫

62 修多羅は必ずしも、前に在るもの(に)は(あら)未⁺。

伽陀は必ずしも、後に在るもの(にはあら)未⁺。へ石山寺本法華義疏長保四年点・卷四、238/中田祝夫『改訂版古点本の国語学的研究 訳文篇』による。ただし「伽陀は」が脱落しているので今補う

まず、56、59は中古の和文資料の例だが、部分否定と解することも可能である。少なくとも全否定と解さなければ文脈が破綻するということはない。

次の60も部分否定と解せないことはない。塚原は後の「われ今身の為にむすべり。人の為につくらず」との対比から全否定が適当だと説くが、一般論に反対して例外的な事例を提示する時に「必ずしも」を用いることは現代でもしばしばあることである——人は必ずしも自分のために住居を造らないが、私は自分のために住居を造る、のように——。これも同じではないだろうか。

その次の61は文意が掴みきれないが、部分否定と解せないことはないように思う。仮に全否定だとしても、文体的に異質なこの例を根拠にして、中古の和文資料の「必ずしも」を全否定と断ずることはできないだろう。

最後の62は「修多羅未必在前伽陀未必在後」の訓読で、

直前には「諸仏或ときは、衆生の為に、直(ち)に説(き)たまひて、修多羅と名(づ)く。或ときは命の初(め)に即(ち)、為に偈をもて説(き)たまふ。故に伽陀と名(づ)く」とある。部分否定と解してよいと思う。

これらとは別に、中古の和文資料で全否定としか解せないものがある。二例ある。

63(中宮様は)いと重き御心なれば、必ずしもうち解け世語りにても人の忍びて啓しけん事を漏させ給はじ。

〈源氏物語・手習、二〇四九⑬〉

64又の日の御覧に、童、下仕などのさまも、いづれもいづれも誰かは、必ずしも「人に劣らん」と思ふがあらん、心々をかしう捨てがたう思し召し定めさせ給ふ。

〈栄花物語・巻第三、上・一一五⑪〉

しかし、これらには次に掲げるような異文があり、問題が残る。63は河内本や多くの別本で、

○必ずしもうち解けぬ世語りにて(も)

となっており、これなら部分否定と考えてよい。64は富岡家旧蔵甲・乙本では「必ずしも」がない。

○いづれかは「人に劣らん」と思ふ、

このように、問題なく全否定と解される例は確認できないのだが、その逆の、部分否定としか解せない例はある。例えば次の例などがそれである。

65(内大臣、近江君に)「……。なべての仕うまつり人こ

そ、とあるもかかるも、おのづから立ち交らひて、人の耳をも目をも、必ずしもとどめぬものなれば、心やすかべかめれ。それだにその人の女、かの人の子と知らるる際になれば、親兄弟の面伏せなる類多かめり。まして」と〈源氏物語・常夏、八四四⑤〉

66(御息所、落葉宮に)「……。後(Ⅱ後世で)必ずしも

対面の侍るべきにも侍らざめり。まためぐり参るとも、甲斐やは侍るべき。……」など〈源氏物語・夕霧、一

三三八⑩〉

65は、人が耳目を止めることが絶対でないなら、「それだに」以下の一文が無意味である。時に耳目を止めることがあるから、「親兄弟の面伏せなる類多」なのである。66も同様で、後世で「対面の侍る」ことが決していないなら、「まためぐり参るとも」という想像は無意味になる。つまり、ともに部分否定と解さなければ文脈が破綻する。

以上の考察から、前掲の論拠(3)は成り立たず、むしろその逆の成り立つことがわかった。したがって、「必ずしも」は部分否定を表すと見てよい。この型を、

Ⅳ 必ずしも——否定

とすれば、Ⅳ型は部分否定を表す文型である。Ⅳ型は一八例(前述の63・64も一往含めた例数)あり、右の挙例の他に次のような例がある。

67これらの集(Ⅱ麗花集・山伏集・樹下集など)に載せ

たる歌は、必ずしも避らず、土の中にもこがねを取り、石の中にも玉の混はれる事あれば、さもありぬべき歌は所々載せたり。へ後拾遺和歌集・序、一〇⑥

68 などが、必ずしも面にくく引き入りたらむがかしこからむ。へ紫式部日記、四九三⑬

中世の用例も参考として挙げる。

69 人ノ命ト果報トハ、カナラズシモツクリアハセヌ事也。

へ愚管抄・卷第三、一三四⑪

70 名ヲ得タル所必シモ興ラエズ、耳に耽ル処必シモ目ニ耽ラズ、へ海道記、新日本古典文学大系九七⑧

また、前節のⅡ型に対応する、

V 必ずしも——は——否定

の例がある。用例数は三例と少なく、また「必ずしも」は「は」の有無にかかわらず部分否定を表すので、敢えてⅣ型と分ける必要もないが、「必ず」と「必ずしも」の文型を平行して扱うために別立する。次がその例である。

71 ここに参り来る事、必ずしもことさらにはえ思ひ立ち侍らじ。へ源氏物語・浮舟、一九〇二⑫

72 心のどかによろづを思ひつつ、年ごろにさへなりにける程、必ずしも志あるやうには見給はざりけん。へ源氏物語・蜻蛉、一九五八⑦

73 さぶらふ人を比べていどまむには、この見給ふるわたり（Ⅱ中官方）の人に、必ずしもかれ（Ⅱ齋院方の女

房）はまさらじを、へ紫式部日記、四九〇⑪

もとより「必ずしも」は否定的事態の成立程度量が大きいことを表す副詞で、Ⅱ型の「必ず」と違い、否定の焦点にならない。それゆえ、「は」によつて別の部分を焦点化してもⅡ型のような複雑さはなく、以後、現代に至るまで安定的である。中世の例を挙げる。76は「は」の代わりに「しも」が用いられた稀な例。

74 「観念座禅は、すでに世も下り、時も過ぎにたり」など言ふ人も侍べし。必ずしもさは侍まじきにや。へ閑

居友・上・八、新日本古典文学大系三七九⑧

75 山の御興防き奉りけん事、必ずしもみづから思し寄るにはあらざりけめど、へ増鏡・第二、二七四⑬

76 又法師品ト申ハ、カナラズシモカウベヲソリ、衣ヲソメタルヲシモ法師トハマウスズ。へ法華修法一百座聞書抄、勉誠社文庫・ウ一五八

おわりに

本稿は、中古の「必ず」が否定と呼応する場合、文型によつて全否定・部分否定の判定ができることを述べた。最後に、その対応の全体を掲げる。

I 必ず——否定 全否定

Ⅱ 必ずしも——否定 部分否定

Ⅲ 「必ず——」——否定 部分否定

IV 必ずしも——否定 部分否定

V 必ずしも——は——否定 部分否定

なお、辞書などで、Ⅱ・Ⅲ型の例を挙げ「必ず」に「必ずしも」の意があると記述するものがあるが（日本国語大辞典第二版など）、Ⅱ・Ⅲ型は文型の表す意味関係によって部分否定と読み取れるのであり、「必ず」自体の語義として「必ずしも」があるわけではない。

注

(1) 本節で述べた副詞の理解は、森重敏（森重「一九五八」など）と川端善明（川端「一九六四」「一九八三」など）の副詞論に多くを欠っている。

(2) 不定語を用いた次のような例も、ここに含めることができる。

a 何もない一本道

b 里程標のない一本道

(3) ほぼ同様のことは分量・数量の例にも言える。

(4) ii型は「は」の他に「しも・も・だに」などが現れる。ただし、ii型の本質は「いと惜しく（助詞）あらず」のように、形容詞類の述語が割れることで、介入する助詞の種類は副次的な事柄だと思われる。iii型は「にもあらず・にはあらず」のように「も・は」などが現れるが、これらのあることは本質的でないと考えて文型から除く。その他の再整理の手順の詳細は省略するが、本稿の文型と中村「一九九五」の主要な文型との対照を示しておく。

本稿	i	ii	iii
中村「一九九五」	[甲][乙]	[I][III]	[II]

(5) 「必ず・必ずしも」の用例数を資料別に示す。調査には、源氏物語は「源氏物語大成」、八代集は新日本古典文学大系、それ以外は日本古典文学大系を使用した（中世の資料も特に記さない場合は日本古典文学大系による）。

土左日記 2例 宇津保物語 1例 枕草子 5例
源氏物語 28例 紫式部日記 3例 栄花物語 4例
夜の寝覚 5例 浜松中納言物語 1例 狭衣物語 2例
後拾遺和歌集 1例 新古今和歌集 3例
なお、次の資料は用例が見出せなかった。

竹取物語 伊勢物語 大和物語 篁物語 平中物語 堤中納言物語 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記 建礼門院右京大夫集 古今和歌集 後撰和歌集 拾遺和歌集 金葉和歌集 詞花和歌集 千載和歌集

また、落窪物語に「かやうの物必ず持たるはなきが」（六九四）という一例があるが、「必ずは」というのは他に類例がなく、存疑として用例から除く。

(6) I型の二重否定の例は「必ず——否定」「否定——否定」で、後述のⅢ型「必ず——肯定」「否定——否定」とは容易に見分けがつく。

(7) 部分否定の例として、次例の挙げられることがあるが、

○女御更衣といへど、……、心ばせ必ず重からぬうちまじりて、思はずなる事もあれど、（源氏物語・若菜下、一一九八⑪）

これは「心ばせハ必ず「重からぬ」がうちまじりて」で、「必ず」は否定と関係しないと思われる。

(8) 35は「必ず良き」人ならず」と見ればⅢ型そのものだが、Ⅲ型の例に比べて「必ず」の係る部分「良き」が単純すぎ、Ⅲ型は「くならず」でなく「く（しも）あらず」となるので（50・54・55参照）、Ⅲ型としない。ただし、Ⅲ型に近いことの証左になる。

参考文献

- 大坪併治「二九七六」「うつたへに」と「かならずしも」(『国語国文』45-2)
- 川端善明「二九六四」「時の副詞(上)——述語の層についてその一——」(『国語国文』33-11)
- 川端善明「一九八三」「副詞の条件——叙法の副詞組織から——」(渡辺実編『副用語の研究』明治書院)
- 小柳智一「二〇〇二」「古代日本語における限定の副助詞」(筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究成果報告書、平成12年度Ⅳ別冊『日本語のとりたて』)
- 鈴木丹士郎「二〇〇三」「近世文語の研究」東京堂出版／第十三章「かならず」と「かならずしも」——交錯から分化へ——
- 高山善行「二〇〇二」「日本語モダリティの史的研究」ひつじ書房／付章「叙法副詞の構文機能と意味」
- 塚原鉄雄「一九九一a」「国語副詞の史的研究」新典社／「部分否定と全面否定——土左日記の「かならずしも」を契機にして——」
- 塚原鉄雄「一九九一b」「国語副詞の史的研究」新典社／「土左日記の「必ずしも」
- 中村幸弘「一九九五」「補助用言に関する研究」右文書院／第十一章「いと……ず」と、その周辺」
- 森重敏「一九五八」「程度量副詞の設定」(『国語国文』27-1)

(こ)やなぎ ともかず・本学助教授)